



 國學院大學
KOKUGAKUEN Univ.

院友学芸員

2012 NO.5



國學院大學博物館学研究室

ごあいさつ



國學院大學文学部教授 博士(歴史学)

青木 豊 (あおき ゆたか) 81期史

平成21年(2009)10月1日に、國學院大學大学院文学研究科史学専攻内において博物館学コースが新設され、これと時を同じくして文部科学省の「組織的な大学院教育改革推進プログラム」(大学院教育GP)に、本学大学院での「高度博物館学教育プログラム」が採択されましたことは、『院友学芸員』No.3でも御報告させて頂いたとおりであります。

この三年間の文部科学省のプログラムも平成24年3月末日をもちまして、当初の計画以上の教育成果を上げ、終了する予定であります。平成24年4月からは、当該大学院での「高度博物館学教育プログラム」は文部科学省の予算を離れ、本学独自で継続展開していくことが決定されております。このことは、理事長・学長・大学委員長をはじめとする大学首脳部のご理解の賜物と感謝申し上げる次第であります。

「高度博物館学教育プログラム」の修士課程終了者には、國學院大學独自の資格として「國學院ミュージアム・アドミニストレーター」を、博士課程後期終了者には「國學院ミュージアム・キュレーター」が授与されますが、前期は13名、後期は1名でした。

終了者の進路は、東京農工大学助教・國學院大學栃木短期大學非常勤講師・東京国立博物館フェロー・群馬県渋川市・和歌山県高野町・千代田区立日比谷図書文化館・三重県立博物館・板橋区立郷土資料館・長野県木島平村・日動画廊・(株)スペース(博物館展示施行会社)等々でありました。

また、平成23年4月1日に、博物館学研究室助手として野中優子助手が着任いたしました。野中助手は、博士課程前期博物館学を終了し、後期一年で中退し奉職いたしました。研究テーマは「イスラームの博物館」であり、大学院に在籍時から度々トルコへ調査に出かけております。また、大学院生時は「高度博物館学教育プログラム」の対象者でもあり、平成22年8月には上述のプログラムの教育特徴の一つでもあります。海外インターンシップ生として中国西安で一カ月就労するなど、国際感覚をもつ人物でありますので宜しくお願い致します。

なお、前任者であります下湯直樹元助手は、平成23年3月31日で3年間の任期を満了し、千代田区立日比谷図書文化館の学芸員として博物館経営に従事する一方で、東京農業大学・杉野服飾大学の非常勤講師として教壇に立ち、博物館学を講じております。詳細は、本文に下湯氏自身が記しております。ご一読下さい。

学部では、本年160余名の有資格者を送り出すことが出来ました。しかし、団塊の世代の方々の退職後の再雇用の期間も終わり、これに伴う補充人事による求人も増加傾向ではありますが、まだまだ就職は厳しいことは事実であります。

何卒、院友学芸員諸氏におかれましては、後輩の就職に関しましても宜しく御指導、御助力の程お願い申し上げます。

平成24年3月20日

展示見学の勧め — 収蔵品と展示の性格 —

東京国立博物館 主任研究員

古谷 毅 (ふるや たけし) 91期史学・93期博士課程前期・96期博士課程後期



博物館学課程では、加藤有次先生をはじめ多くの先生方に御指導頂いたが、加藤先生の博物館・博物館学の魅力を語る姿は今でも強く印象に残っている。現在も手元の実習で作成した拓墨や拓本などは、よき思い出である。

卒業後、大学院と6年間の高校勤務の後、現在の職場で仕事に就き、梱包・輸送・展示をはじめ、寄贈・購入等や収蔵資料の整理・修理など、それまで学んだ範囲では収まらないさまざまな経験をした。未経験の仕事はその場で先輩から教わり、それが望めない場合は予め先輩に伺っておくことが重要であった。一つ一つ身につけるのに、随分と日数がかかったように思う。大学での勉強とこのような経験が現在の仕事の基礎となっている。

ところが、いざ展示を構成する場合には、資料の性格によってまったくタイプが異なる展示を計画することになった。その際、大学内外で触れたさまざまな展示見学の経験が貴重な糧となっている。中・高校時代に続いて専門分野(史学・考古学)や研究会(文学・民俗)に関係する展示施設を巡るようになり、数多くの見学が幸いした。

想えば博物館との関わりは、小・中学校時代の社会科見学にさかのぼる。工場や公共施設の展示施設などで、個人的には醤油工場やゴミ焼却場など、普段見たこともない道具や作業を紹介したパネルなどが印象に残った。また、中学校以降に合宿・調査などで各地を訪れては、まずは地域を知るために郷土資料館等を見て廻ったが、事前に調べた以上の情報が得られたことは云うまでもない。これらは個性的な各施設が機能上、選択して収集した資料の展示で、観覧者に正確な情報が伝わるように施設側(設立者)側の目的に従った発信形の展示(A)であった。

一方、幸い大学のある都内の博物館・美術館には普段から接する機会が多く、多様な特別展を見る機会に恵まれた。特別展はもちろんテーマ仕立て、文書史料や考古・民族・民俗資料、美術・工芸品などが目的に沿って集められ構成・展示される。とくに好きな絵画や海外遺跡を紹介する展覧会は相当見て廻ったが、目的をもった勉強(実は…足りない分野)には一番の近道であった。いわば観覧者の側に向けた提案形の展示(B)であるといえる。

ところが、博物館の勤務では日常的に多くの特別展に携わり触れる機会を得たが、この10年は館内分業で特別展以外の仕事が主であった。なかでも、年1~2回担当

する特集陳列のうち、文化庁相互貸借事業では例年地方博物館の借用品に館蔵品を加えて展示を構成している。前期古墳や朱・陶棺などさまざまなテーマに取り組んだが、最近では「古代技術の保存と復元」(2008年)、「終末期古墳」(2009年)、「古墳時代の甲冑」(2010年)、「よみがえるヤマトの王墓」(2011年)、「古墳時代の神マツリ」(2011年)や、寄贈資料を軸にした新設の常設展示「飛鳥古代の古墳」(2011年)などである※。もちろん、これだけのテーマを収蔵品で構成できることは実に恵まれていると感じているが、通常展示の機会が少ない収蔵資料を整理・修理した成果を公開(展示・出版)する貴重な機会という側面が重要である。いわば施設側(所蔵者)側の責務を果たす還元形の展示(C)ということができると思う。

一口に展示といってもさまざまな性格があり、収蔵品(コレクション)の性格や質によって規定される。それぞれの違いは、生涯教育的観点でも複数の異なる対象に向けられていることで明らかで、その社会的使命は多様である。国立博物館は一般にナショナルセンターとしての役割が期待されているが、東京国立博物館の収蔵品の特色は明治4年以來の収集活動と戦災を避けるための疎開も含めた整理・維持管理の結果であることを忘れてはならないと思う。日本の近代化と共に文化財として認識された履歴が刻まれた資料群といえ、B・Cの展示活動は東京国立博物館にとって車の両輪ともいえる。

博物館の評価が叫ばれる中で、しばしばBの入場者数の比較がほとんどであるが、A・Cの必要性が意義づけられカウントされてはじめて、正確な博物館活動の評価に値すると考えるが、如何であろうか。



古墳甲冑の列品解説

博物館は市民から支持されているのだろうか

神奈川県立歴史博物館 専門学芸員

鳥居 和郎 (とりい かずお) 83期史



私は、昭和56年（1981）に神奈川県立博物館（現県立歴史博物館）へ中世史担当学芸員として就職した。近年は企画や教育普及に関することが中心となっているが、大部分は主に戦国時代の担当として勤務してきた。私がこれまで留意してきた事にモノの見方がある。多面的な視点を持ち徹底的に見ること、また通説的な評価を離れることである。これによりモノが持つ様々な情報を読み取ることができ、幾つかの知見を得て論考や特別展などで紹介した。ところで現在は表面的には沈静化しているが、先頃、博物館界を揺るがせた指定管理者制度問題では博物館と利用者である市民の受け止めに大きな違いが見られ、それまで博物館が市民を館側からの観点で見ていた結果とも思え、自分なりに反省することがあった。

1980年代後半から90年代初頭のいわゆるバルブ時代、各自治体は競って博物館施設を建設した。これを見て各地に博物館文化が根付くことが期待された。しかしバブル崩壊後の急激な財政状況の悪化により、特別展の規模の縮小、常設展示の更新の中止、休館や閉館に至った館もあるなど「冬の時代」が訪れた。このような状況により博物館施設に対して経済性や収益性が求められ、平成15年には地方自治法の一部改正により、公立博物館の管理を民間事業者（指定管理者）が行うことが可能となり、この制度を導入した自治体も少なくない。

この制度の導入には、直接的に入館者（収益）増に結びつかない調査研究や教育普及などが軽視されること、また、数年毎の入札で管理者が変わる可能性もあり博物館事業の継続性に不安があることなど、博物館関係者を中心として反対の声があがった。19年に日本学術会議は「博物館の危機をのりこえるために」との声明を発表し、この問題が博物館界だけではなく社会的なものになったと感じたのは私だけではなかろう。だが管見の限りでは、博物館の利用者である市民側からの声はほとんど聞こえず、むしろ財政改善の一策としての認識にとどまったのではなかろうか。自治体ごとに博物館施設が存在するような時代となったが、市民に博物館文化が受け入れられているとは言い難いように思えた。

博物館側と市民の感覚のズレの原因は何であろう。かつて私は良いモノを収集して展示すること、充実した特別展を行えば自ずと博物館の必要性は市民に認識される

ものと思っていた。しかし、それは展示という博物館の魅力の一部を示すだけで、博物館施設そのものの必要性を伝えることにはならない。しかし、私が勤務する館もそうであるが、多くの館は特別展を活動の中心にすえている。それだけでは指定管理者問題で示されたように、運営体制、また活動の質の変化が予測されても市民はほとんど関心を寄せず、大方の受け止めは展示施設があれば良いというものであったのかもしれない。

また、市民にとって一番理解されやすい展示事業について、昨今、私が気にかかることがある。私が担当する資料に対し他館より出品依頼を受けることがある。他にふさわしい資料があっても図録で紹介された資料から選ぶ場合が多いこと、依頼のため来館しているにも関わらず資料の実見を求めないこと、一面識もないにも関わらず電話だけで出品依頼を行うことなど、モノに対するこだわりを感じない学芸員が時折見られるのである。これでは利用者である市民に対し眼差しを向けることも期待できないのではとってしまう。

「博物館冬の時代」を乗り越えるためには、財政的な好転だけがあれば良いというものではない。顧客ともいえる市民をもっと見つめ、博物館の様々な機能を介した関係を構築すること、また、博物館の必要性とともに学芸員の活動が市民に認識されるような取り組みを強化することも必要であろう。これらはイベント的に一時的に注目を集めるという取り組みではなく、博物館経営の課題として位置づけて継続的に行うべきものであろう。直ぐには結果が見えないかもしれないが、少なくとも指定管理者問題の時に見られた博物館と市民の意識のすれ違いは避けられるのではなかろうか。



近年、担当した特別展の図録

理工系科学館の今 —文系と理系の狭間で—

千葉県立現代産業科学館副館長

関口 達彦 (せきぐち たつひこ) 86期史



平成23年3月11日に発生した東日本大震災は、私たちの社会や生活に大きな衝撃を与えました。震災後の人々の考え方や生活様式は、これまでとは異なる様相を余儀なくされています。この影響は様々なかたちで、永く続いていくと思われまふ。博物館やそれを取り巻く状況も例外ではありません。博物館の運営だけではなく、博物館のあり方にも考えさせられることが多くなりました。

私は現在、現代産業科学館という理工系の科学館に勤務しています。史学科で考古学を専攻し、卒業後は千葉県文化財センターなどで永いこと遺跡の発掘調査を中心に、埋蔵文化財の分野で仕事をしてきました。体験型の博物館である房総のむらで初めて博物館の職員となり、今度は専門分野が異なる科学館に異動となりました。当初は、展示内容や専門用語の難解さもあり、文系の私が理系の科学館で仕事することに多少の戸惑いもありましたが、次第にこの科学館の面白さがわかってきたつもりです。理工系の科学館に勤務している院友も少ないでしょうから、どのような活動をしているのか、少し詳しく紹介します。

当館は、子どもから大人まで誰もが産業に応用された科学・技術を体験的に学ぶことができる場を提供する博物館として、平成6年に開館しました。千葉県の代表的な産業である電力・石油・鉄鋼産業をはじめ、先端技術や生活に身近な科学の原理を紹介する展示活動や教育普及活動を展開し、平成23年で17年目を迎えます。

本年の8月には開館以来、入館者数が450万人を突破しました。この間、入場料の有料化などもあり、入館者数が減少していた時期もありましたが、次第に持ち直す傾向にあります。これは、日常の活動はもとより、当館が様々な形で学校・企業・大学等を軸にした地域連携をさらに深め、地域の特性を活かした理科教育や科学・技術関連の事業を展開し、地域における拠点の一つとなるような科学館を目指してきたことによる成果であると考えています。

この成果は、具体的には2つの柱で構成されています。一つ目は、学校との連携、特に理科教育等の支援です。例えば、新学習指導要領に基づいた学習内容に対応する展示や実験教室の紹介をホームページ上に公開し学校の先生方の利便性を図ったり、教職員を対象にした当館の体験研修を行うなど、学校教育で不足している理科学習の支援に力を入れています。また、利用者の来館を待つのではなく、こちらから積極的に館外へ出て行う実験や工作教室などの出前授業も行っています。このような事業の担当は、理科教員としての実績を積んだ研究員が行います。

二つ目は、当館の特徴の一つである「展示運営協力会」を中心とした企業・大学・研究機関等との連携です。この協力会は、館の活動の趣旨に賛同する専門的な知識をもつ団体等によって開館当時から設立され、これまでに展示資料の提供や技術的な支援・助言を数多くいただいています。

また、科学館の展示構成は子どもを対象にしているものが多く、そこから教育の思想が欠落すると、単なる娯楽的な施設になってしまいます。そこで、当館では全体的な展示について、科学や技術が私たちの生活や社会にどれだけ役に立っているのか、具体的な製品をとおして多くの人に理解してもらうためには何をどのように示すべきか、という観点から展示を構成するようにしています。博物館は、教育機関であることを十分に認識することが大切です。

大震災以降、人生を豊かにし、多くのものをもたらすはずの博物館の存在意義が問われています。このような時に思い出すのは、『莊子』外物篇の「無用の用」の話です。あなたの話は役に立たない、と言われたことに対し莊子は次のように答えます。「大地は広大なものだが、人が使うのはその足が踏んでいる部分だけです。しかし、その部分だけを残して周囲を黄泉まで達するくらい深く掘り下げたならば、果たしてその土地は人の役にたっているといえるでしょうか。・・・」

学芸員を目指す学生のみなさんの周囲には博物館をはじめとして広大な知の大地が広がっていることを、まず自覚すべきです。本来、人は両足の部分だけでかろうじて立っているわけではありません。足元の大地の広がりや豊かで確かなものにするためには、掘って立つべき場所を確立し、時代の変化を楽しみながら、幅広く学んでいくことが必要です。学生時代の学びの質が、これからの生き方を規定することを忘れずに、これからも有意義な日々を送ってください。



講義の様子

学芸員として必要なもの



埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸主幹

杉山 正司 (すぎやま まさし) 88期史

学芸員に必要なもの、学芸員としてどのような資質や心構えが求められるだろうか。

学芸員は、研究や学芸業務などの“仕事ができる”ことが大事だと思っている人も多いだろう。勿論、そうしたことは必要である。しかし、その前に学芸員として、また人としても必要なものがあると、日ごろから私は感じている。

学芸員としてのキャリアや仕事ぶりだけで、あの学芸員は立派だ、よく仕事ができるなどと外見で評価する向きがある。そうした評価がなされるまでには、学芸員として様々な苦労はあるし、私が考えている内面の必要な資質が備わっているからこそともいえる。だが、学芸員の中には、必ずしも外面だけで、内面の資質を持っているとは限らない。

年のせいかわからないが、若い学芸員や学生たちと接していると、その内面の資質が欠如している者たちが見受けられ、非常に不満であり不安になることがしばしばある。

今の若い人たちには、「誠実」、「誠意」、「正直」といったものが備わっていないのではないかと、疑いたくなることが度々ある。仕事を完遂できず投げ出す。自分さえよければ、いい。あるいは人の誠意を踏みにじる。その場しのぎに平気で嘘をつく。信頼できない。

そのような時、恩師の加藤有次先生の言葉を思い出す。

「あの人は、…だから」と言われるような学芸員には、ならないようにしなさい。「あの人なら…」と言われるような学芸員になりなさい。

とおっしゃっていた。

「あの人は…」の…には、いい加減、不誠実、誠意がないなどの、マイナス評価の言葉が続く。

一方、「あの人なら…」の…には、信頼できる、頼りになる、安心だなどのプラス評価をする言葉があてはまる。

展覧会などで資料を借用するために、所蔵者のお宅を訪問して調査や出品のお願いをすることがある。時折、所蔵者から、このようなことを言われることがある。

「この資料は、博物館に貸すのではない。あなたに貸すのです。」

学芸員であるならば、おそらくこれに近い言葉を聞いている人も少なからずいると思う。こうした所有者は、過去に資料の貸し出しや調査に際し、不快な思いをしたことがある場合が多い。好意で調査や出品を承諾しても、その後の対応に誠意が感じられない不満。質問や何か聞いても適当なことを言い、または嘘をつく。万一の資料事故を起こしても不誠実など、様々な理由がある。

本質は学芸員個人の問題ではあるが、学芸員は博物館の看板を背負っており、所有者にとって担当学芸員はもちろん、博物館にも問題があると考えるのである。博物館との関係を疎ましく思い、不快な思いをしたくないために調査や出品を門前払いで断るということになるのである。

お互い人である。あの人は信用できないでは困る。あの人なら信用できると言われるようであればならない。それには、誠意をもって事にあたり、日ごろから誠実な心がけ、正直に生きなければならない。

所有者だけではなく、学芸員（同僚）、博物館をはじめ、「あの人なら」と言われるように、自分を取り巻く環境全てに関して、また資料に対しても誠実であって欲しい。それが対外的な信用となり、館内活動ばかりでなく、外部からの講演依頼など、学芸員としての幅も広げることになる。

これは、私が担当する「博物館経営論」で、本学学生に話をする。どの程度理解してくれているか分からないが、学芸員資格を持って社会に巣立っていく院友として、心に刻んで欲しいものである。



館外でのトークショー



展示作業

博物館統廃合の中で



瀬戸内海歴史民俗資料館 主任専門職員

田井 静明 (たい よしあき) 93期史

歴史博物館からミュージアムへ

平成11(1999)年、建物・展示あわせて120億円の巨費を投じて香川県歴史博物館がオープンした。その準備のため平成5年、学校現場(高校教員)から異動し平成13年まで在職した。学生時代に出会った民俗学を仕事とすることになり、専門分野に関する準備もさることながら、建物・事業の創造、すべてに携わった新しい博物館作りは、刺激のかつ有意義なものであった。そして、さまざまな課題を孕みつつも、年間20回を超える部門展示(テーマ展)や実習室を使った食文化体験講座(年間10回)など、いくつかの特色をもって船出させることができた(拙稿「香川県歴史博物館—「開館」まで、そして現在—」『民具研究』123号2001年)。

その後一旦、学校現場へ戻り、平成16年からは開館30周年を終えたばかりの瀬戸内海歴史民俗資料館へ異動となった。資料館では収蔵資料の再整理や展示・普及活動に精力を注いだ。自然・環境分野とくらし(民俗)に焦点を当てた企画展や年間10回の民俗学基礎講座などを行い、全国的にも稀有な広域資料館の存在や民俗の重要性をアピールした。それは施設統廃合の対象となっていた館を何とかしたいという思いからでもあったが、結局平成19年、瀬戸内海歴史民俗資料館は香川県歴史博物館に統合・分館化され、職員数も半減することとなった。

統合・縮小される悲哀を味わったのもつかの間、同年より再び歴史博物館勤務となった。歴史博物館は翌平成20年には県文化会館(美術館施設)も統合し、文化会館の学芸スタッフ・美術作品も歴史博物館に移され、館名も香川県立ミュージアムと改称した。専門館化していく全国的な流れとは逆に、歴史・美術分野の統合館として再スタートすることとなった。歴史博物館開館からわずか10年を経ずの大きな変化は、統合3年を経た現在ようやく落ち着きつつある。

学芸員の調査・研究成果の公開や収蔵資料の積極的な活用をめざしてはじめた部門展示(現在は企画展示と改称)は年間10回程度に半減、食文化体験講座もほぼ休止状態となっている。代わりに美術系を中心にした年6回の特別展や美術作品などの学校への出前教室などが、リニューアルになった館の特色となりつつある。人口100万人の小さな県での大きな箱モノ整備は、施設統合という選択を経て、とりあえず歴史博物館時代の2倍以上の年間利用者数を獲得するという成果を得た。

短期課題と中長期・火急の課題

文化施設の統合を終えた今、思うことがいくつかある。公共施設にとって、施設利用者数や費用対効果、事業評価、県民・市民の要望や満足度への対応など、直近、短期的な課題の解決は重要であり、それへの真摯な対応なくして館の存続はない。しかし、地域博物館、県の中核館として中長期的な視点で何をなすべきかも忘れてはならない。地域

の50年後、100年後に何が必要なのか。今、何を残し、何を事業として行い、学芸員として何をすべきなのか。

地域の歴史民俗資料館や収蔵保管施設は、市町合併の中で統合・廃止されたり、施設的にも老朽化の一途をたどっている。また、これまで地域博物館を支えてきた学芸員第一世代も退職を迎えようとしている。施設もヒトも過渡期を迎えている。満杯になった収蔵庫の、山と積まれた資料をこれからどのように活用していくのか、若い学芸員や学芸員を目指す学生さんたちの苦悩・課題は大きい。宝の山のはずが、情報量の少ない資料・適切な保存管理がされていない資料ばかりとなれば、悩みの種が増えるだけになるかもしれない。調査研究や資料整理・管理は中長期的には欠くことのできない大切な業務なのである。また、火急の課題もある。民俗分野においては、高度経済成長以前のくらしを体験している人は減少し、特に島嶼部や中山間地域では限界集落が増加の一途をたどっている。地域文化は危機に瀕しており、資料収集や記録化は急務なのである。

学芸員を目指す学生たちへ・大学へ

たかだか10数年の浅薄な経験からではあるが、資料館・博物館にとって重要なものは「モノ(資料)」と「人(学芸員)」であるにつくづく感じる。箱(施設・設備)は10年も経てば時代遅れのものとなる。「人」を育てつなげ、「モノ」をさまざまな情報とともに後世に伝えることが、地域の未来に貢献することになると信じている。

他人さまのものをいただいたり、借りたりして調査研究や展示を行う学芸員の仕事は、地域の人たちや関係者の理解と協力なしには成り立たない。まずは誠実・実直であること。そして自分のやりたいことを理解してもらえただけのコミュニケーション能力をもつこと。もちろん専門分野の知識・技能を高めておくことは当然である。学生の皆さんには、是非、地域の未来に関わる仕事・学芸員を目指してほしい。

今の私の礎は、國學院大學在学中の民俗学研究会(サークル)での活動にある。民俗学の基礎や魅力を先生や先輩、フィールドから学んだ。調査の計画や実施も先生のサポートのもと学生たちが取り組んだ。また、院友が活躍する近郊の教育委員会や博物館の民俗調査をいくつも経験させていただいた。これは今も大きな財産となっている。学生さんたちには、大学がもつ高い専門性・教育力と人的ネットワークを活用してスキル・アップのために多くの時間を使ってほしい。大学にもお願いがある。地方の市町立資料館では1人の学芸員を採用するのも大変なことである。歴史・民俗・考古・仏教美術等々、何でも取り扱え、興味関心をもって対応できる職員が必要である。高い専門性の習得は勿論であるが、多様な角度から地域文化を再発見できる人材育成にもぜひ取り組んでいただきたいものである。

辰野美術館に勤めて

アートを媒介して広げる美術館活動

辰野美術館 学芸員

赤羽 義洋 (あかはね よしひろ) 85期史



私の勤務する美術館は、長野県の中央部、伊那谷の北の入口にある。公園になっている小高い丘の上に建ち、周囲には里山の自然が広がっている。折から全国に美術館建設ブームが広がりつつあった33年前に数少ない町立美術館としてオープン。今では美術館・博物館数が多いことで知られる長野県内で、当時は有数の床面積を誇っていた。大正時代にいち早くマチスに師事した画家・中川紀元など町ゆかりの美術家の作品をはじめ、町内遺跡の出土品、廃窯した地元の焼き物、朝鮮古陶など展示は誠に多彩で、「辰野町郷土美術館」と称して開館したほどに“郷土館”に似つかわしいものだった。

当初は、和洋折衷、金閣寺を模したという当館の寺院風で奇抜な風貌に恥じらいつつ、「美術はグローバルなのに」と自問しながら仕事をしてきたが、二度目の美術館勤務となった12年前からはいささか意を決し、古いものと新しい表現とを積極的に関与させる取り組みを進めてきた。縄文土器と現代の美術とのコラボレーションにとどまらず、館内外でのワークショップ開催など参加体験型の活動を提供。社会との結び目をさぐる現代の美術家を介在させ、空き家や廃屋をモチーフにしたプロジェクト、巨樹や古い寺院の山門の表面を型取りしてのキャンドルやオブジェの制作などを行ってきた。折しもデジタル情報があふれる時代を迎えて、触覚や身体性、境界と表面をテーマに据えたものだった。

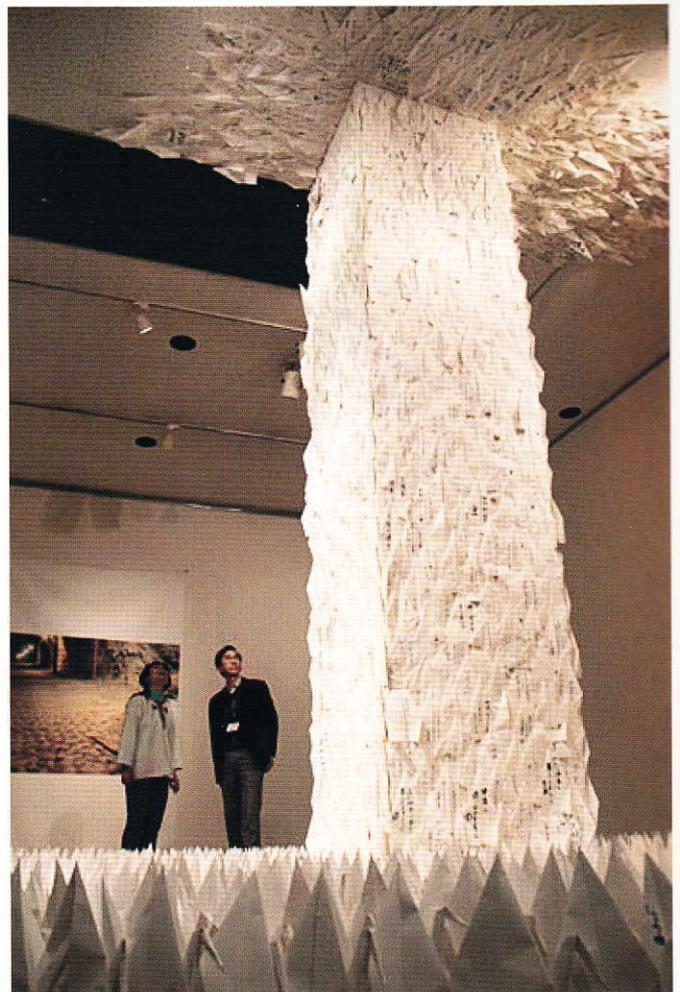
アートにはさまざまな価値が含まれていて、どんなものにも媒介できる。音楽や身体表現など芸術の縦割りを超えたコラボレーションに限らず、まちづくりや福祉活動へも広がる多様な効果を持っている。私自身もいくつかの住民有志団体の活動に参加しているが、それぞれの場面でこうした「接着性」の良いアートの属性を活かしたさまざまな着想や手法を仕組めないかと構想することが多い。

「シャッター通り」と化した駅前の古い商店街をめぐるさまざまなワークショップや街歩き、商店の人々との協働イベント、館の所在する公園一帯の自然を素材にした多様な切り口での活動に参画してきた。美術の「術」によって、接点のなかったさまざまな人々が垣根を越えて結びつき、地域の埋もれた「宝もの」に大勢の人々が気づくことに関わりあうことが、美術館活動のひとつと

してふさわしい。

発掘され、長年収蔵されてきた縄文土器の破片の数々を持ち出したり、植物のサンプルを持って各所を訪れたりして、拓本ワークショップを行ない共同作品の制作へつなげた。誰もが知っている折鶴の制作を町内外の各所で行なったゲリラワークショップでは、一人ひとりのメッセージがドラスティックな作品となって館内に出現。人々が出会い、つながっていくこと自体がアートとなった。

今後も、エコノミックなものやビジネス化に抗うアートの力や表現を美術館の活動に生かしていきたいと考えている。



折鶴のワークショップでできあがった作品

和歌山市立博物館の建設に携わって

和歌山市立博物館総括学芸員

高橋 克伸 (たかはし かつのぶ) 88期博前経

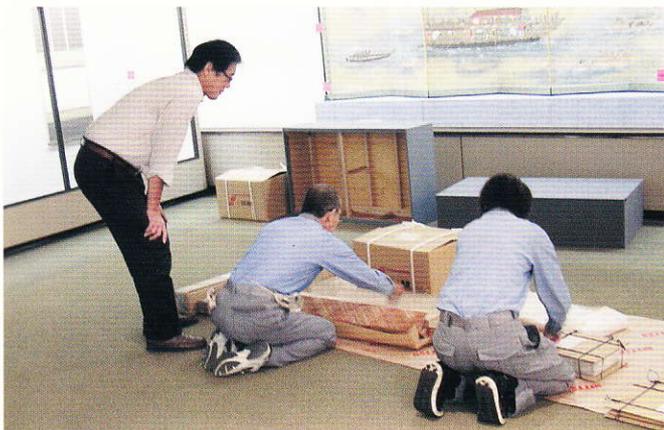


昭和60年11月に和歌山市立博物館が開館しました。まさに地方の博物館建設ブームの時期でした。当館は和歌山市の歴史を語る資料を展示・調査・研究・保管することを目的とした歴史系の登録博物館で、国の公開承認施設でもあります。年2回の特別展と特別陳列、その他、博物館講座や史跡散歩、子どもたちを対象にした体験学習や展示など、博物館に親しんでいただくための事業を行っています。開館25年を過ぎ当館が市民の間に定着してきたかという、一概に言えないのが現状です。

和歌山市立博物館の建設構想は、昭和44年に和歌山市長期総合計画で提案され、これからすると開館に約16年を要しています。私は昭和55年3月に博物館開館準備のために採用されました。しかし、それまでの開館準備というと、ほとんどが先進館の視察と報告で終わり、どのような博物館を目指すのか、またこれを受けて具体的にどのような展示や施設を建設し運営するのか、なんら具体案もないままでした。さらに、開館時期を昭和58年に予定していたため、早急に施設の設計や展示設計など、喫緊の問題が山積していました。行政的には建物を建設し開館したら完了という認識でしたが、文化財を保存・展示するという施設で、建物の乾燥期間や展示の調査・設計など、簡単に出来るものではありません。大学を卒業してすぐ、行政の仕事もあまり理解できないままこのような問題につきあったため、「博物館とは何か?」、「将来的にどのような博物館にしたいか?」など毎日、自問したような気がします。このような困難な時に多くのアドバイスをいただいたのが、和歌山県教育委員会の文化財関係に携わっている院友の先輩方や、近隣の博物館で活躍されている先輩方でした。とくに施設面で印象に

残っている言葉が「収蔵スペースを広くとること」、そして展示面では「あまり多くの造作物(実寸大模型)を造らない」ということでした。つまり、展示室にはケースがあればよいということです。どうしても、施設が先行し、展示資料が少ない中、展示の手法として模型やパネルなどの2次資料が多用され、これが、その後の展示替えにネックになる場合が多くなるということでした。しかし、何よりも重要だったのが学芸員を採用することでした。当局とも何度も交渉を重ねた結果、開館2年前に5人の学芸員が採用され、私を含め6人の体制で開館にこぎつけました。この間、施設の設計協議、資料の借用交渉・調査、レプリカや模型の制作、展示解説や図録の作成、開館特別展としての山東省済南市の友好展の準備など、「博物館学」で教わったような内容を現実に体験しました。開館後、入館者を増やすための企画等、多くの人に利用していただくための方策を検討してきましたが、なかなか入館者増にはつながっていないのが現状です。近年、指定管理者制度や市民との協働など、博物館としての新たな運営が求められています。確かに博物館に多くの人が入館していただくことは重要ですが、これは近年に始まったことではなく、運営の基本です。それよりも重要なことは、学芸員が調査・研究を中心とした活動が出来ることだと思います。そのためにも、学生の時にしっかりと研究基礎を築き上げることが重要です。私は、博物館=学芸員だと考えます。

最後になりましたが、東日本大震災や当県も被害を受けた台風12号による豪雨災害で被災されたみなさまにお見舞い申上げるとともに、歴史を保存し、将来へ受け継ぐ博物館の重要性を改めて感じさせられました。



特別展展示作業



中学生の職場体験

学芸員になって20年

—小さな個人美術館での仕事とこれから—

一般財団法人鹿野出版美術財団 竹久夢二美術館 学芸員

石川 桂子 (いしかわ けいこ) 98期史



東京・文京区の竹久夢二美術館に、私が学芸員として勤務し始めたのは1991年春のことでした。その前年に新卒として東京ゼロックス株式会社(現:富士ゼロックス東京株)に勤めながらも、私は本来希望していた学芸員の道を模索しており、丁度開館まもない竹久夢二美術館が学芸員を公募していたことを知って転職を決意し、念願叶って採用されました。そして2011年春には、学芸員になり20年の歳月が経ちました。

当館は、弁護士で前理事長・鹿野琢見(1919-2009)の竹久夢二コレクションを軸にした私設美術館で、1990年11月に開館。1984年には前身となる弥生美術館(明治・大正・昭和時代の出版美術、挿絵画家を研究・展示)を設け、現在二つの美術館は共に活動しています。

小規模な私設美術館という性格上、入館料をはじめ、グッズ販売、作品や画像貸出、原稿執筆、商品開発の監修等で如何に収益を上げ、さらにお客様に満足して頂くにはどうすればよいかを追求し、さらに職員一人一人がコスト意識をもって、館の運営に従事しています。

そしてこの館における学芸員の仕事ですが、非常に多岐にわたり、館で実施する企画展の準備を中心に、いわゆる学芸業務に留まらず、キャプション・パネル類のデザインや制作、広報及びマスコミ対応(原稿作成中に、BS日テレ「ぶらぶら美術・博物館」の撮影がありました)、ミュージアムグッズ開発、イベント企画、時には受付窓口での接客にも及びます。小規模でスタッフが少ないゆえ、学芸員としての専門性の追求は勿論のこと、効率良く物事を進める能力、様々な事象に対応出来る柔軟性、そしてバランス感覚が求められます。

またこの館の学芸員ならではの使命として、収蔵品に誇りを持って、「竹久夢二」を誰よりもクローズアップし、その魅力を最大限に活かすことが挙げられます。夢二の芸術とその周辺を丹念に調査し、その成果を学術的

な研究や展示に反映させるだけでなく、幅広く普及に務めています。その実例ですが、近年ではユニクロ製のTシャツ・浴衣とのコラボレーション、また2011年4月より、広告宣伝・商品開発の一環として大日本印刷が運営する「イメージアーカイブ」でデジタルデータの公開を始めました。加えて展覧会図録の作成は、出版社と連携することもあり、市販される書籍・画集の刊行を実現しています。特に「らんぶの本」(河出書房新社)では実績が多く、学芸員が担当編集者に企画書を提出し、社内の会議で可決されると、学芸員は著者として、編集者と出版に向けて共同作業をしていきます。館と出版社、それぞれの立場を活かして出来上がった本は、普及と広報、流通面においても、高い効果を得られることが利点です。

さて学芸員になって20年、美術館・博物館、そして学芸員をとりまく状況の大きな変化を実感しています。他館と同様に、多様化する仕事に対処しながら、私自身は、所蔵作品を十分に調査し研究を継続すること、そして自館の個性と役割を再認識して情報発信することを課題に、加えて館内外でのコミュニケーションを大切に、学芸員の仕事に取り組みたいと考えています。

ところでこの原稿執筆依頼の際、青木先生から「女性学芸員が少ない」という現状をお聞きしましたが、勤務先が美術系ということもあり、個人的には女性学芸員との交渉が多く、中には子育てをしながら、公私共に多忙を極め、ご活躍の方もいらっしゃいます。余談ですが自分はというと、夫婦二人暮らしで、昨年まで夫は某新聞社の文化部に在籍し、美術記者として多くの学芸員に取材し交流もあったため、この仕事に理解があり、時には助言や厳しい言葉も呈されます。

最後になりますが、学芸員はとてもやりがいのある仕事だと思います。特に女性で学芸員を志望する後輩の皆様のさらなる躍進に期待しています。



ギャラリートーク



著書より

神職はその地の学芸員

岐阜県博物館協会会長 白山神家 若宮修古館館主

若宮 多門 (わかみや たもん) 81期神



漢字「祭」は夕(肉)と又(手)と示(机)から成る文字である。肉は犠牲の肉、手はそれを供える手、机は肉を神に供えるための神前棚を表す。神を迎え神前棚を設け饗応の食物を供え神の心を和ませる。その祭りが神意に添うものであれば、今後の平安や食の恵みが約束される。意に反するものであれば災いが訪れ、飢餓や争乱が起こる。人々は神を畏れ敬い神意に添わんと、最上の神前を調べ、最上の食を供え、感謝や祈りは特殊な形となり、やがて作法や歌舞で現わされることとなる。そこでは人々もまた、神と共に飲食し、和み楽しみ喜んでいる姿を見せ、いかに神意に感謝しているかを示すのである。供えマツリ、拝みマツリ、神とマツワル。地域ごと部族ごとのまたその時代時代の神への最高の表現が祭であった。「祭」とはそういう文字なのである。

現在、法人登録されている神社本庁所属の神社はおおよそ八万社とされる。年ごとに全国各地でそれぞれの神祭りは催され伝承されている。八万の神の八万の物語が八万の地域に伝わり、日本の国柄を創りあげてきた。私たちが国や地域の歴史、文化を学ぼうとする時、各地の神や祭りが多くのヒントを与えてくれる。今、敢えて加えるなら、昨年3月11日に稀有の災害を経験した私たちは、如何にしてこの自然と付き合っていくのか？ 今ある政治や経済の仕組みはこのままで良いのか？ 便利さを求める社会や自己の欲望とどう向き合っていくのか？ 神々はその答えを提示してくれるであろうし、今こそ神意に応える時であろう。

かつて先人たちは平安な暮らしを願い、その地に水の神や豊穡の神を祀り、彼らの祖霊たちを祀って神の意に感謝し、恐れ敬ってきた。祭りの庭では、最初の恵みをまず神に供えて予祝を行い、身の安全や豊かな収穫を願う。やがて神の前庭は会議の場となり、芸能の場となり、男女の交流の場、また、人や物の行き交う市場となった。神の前庭から、その他の文化は生まれるのである。

私たちは学ばねばならない。神奈備の御山から静謐な社殿から、神具や御神宝から、神前作法や御神楽から、神話や古き文書から……。時には鎮守の森から聞こえてくる祭り囃子にも耳を傾けたい。まことに神社とは博物館資料の最上の宝庫である。どんなに小さな神社にも、どんなに辺境の地に祀られている祠にも大いなる物語が隠されている。よく見つけ、保護し、資料を収集・整理

し、研究し、そして発信する。それは八百万の神々の物語を綴り聞かせる一助ともなろう。

國學院大學の設立精神の基層に神道や日本文化があることを思えば、これから神職を目指す学生はもとより、その学科を問わず、是非、学芸員資格を取得してほしいものである。

さて私は岐阜県郡上市の白山信仰の社家に生まれ長瀧白山神社に奉職以来三十数年、浅学ながら白山文化の研究と発信に関わってきた。加賀白山といえども、実は白山神社が最も多いのは岐阜県である。大正3年の内務省調査によれば、その数525社、全国に祀られているほぼ五分の一が岐阜県に集中している。「地域の文化を学ぼうとする時、その他の神が多くのことを教えてくれる。」岐阜県内のどの町や村にも必ず白山神社は祀られている。白山文化の研究は岐阜県の歴史・文化の研究でもあるということである。

現在、私は140の博物館や美術館が加盟している岐阜県博物館協会の会長を務めている。就任当初は「田舎の一神主が受けてもよいのか」という思いもあったが、今ではそれは必然のことではと考えている。その地の神社に奉仕する神主は、その地の有能な学芸員たれと願っている。



講演の様子

公立博物館から大学に移った 10年間にやったこと

法政大学キャリアデザイン学部 教授

金山 喜昭 (かなやま よしあき) 85期史



私は、國學院大學を卒業してから35年近くになる。その後、加藤有次先生の助手となり、野田市郷土博物館の学芸員として18年間、現場で仕事をする事ができた。法政大学には、院友の段木一行先生の後任として、文学部教育学科において学芸員課程を担当した。1年後に教育学科を発展・改組して、キャリアデザイン学部を新設したが、資格課程を合わせることになり、私もそちらに転籍して今日に至る。

大学に移ってから手掛けた仕事は大きく2つある。一つは、段木先生の在任中に設置した展示室を活用した学芸員課程の授業の充実をはかることである。展示室は、市ヶ谷キャンパスのポアソナードタワー14階にある。展示室といっても将来的に大学博物館を建設する過渡期の役割を果たす位置づけによる。まずは学内で定期的に展覧会を行うことで、法人や各学部のコンセンサスづくりをはかることを目的にしているので、本格的な博物館の展示室とはいえない。近年では、「樽職人～玉ノ井芳雄のキャリアと技～」(2006年度)、「能面～神宮清氏作品～」(2007年度)、「玩具と音の景色展」(2008年度)、「玩具展～モチーフとしての動物たち～」(2008年度)、「凧～法政大学所蔵・比毛一郎コレクション展～」(2010年度)、「ヒーロー・ヒロイン、凧見参」(2010年度)など。今年度は「法政大学スポーツ展～法政野球～」(2011年度)(写真)に行ったばかりである。

もう一つは、私が在職していた野田市郷土博物館の改革である。私の退職後は、行革による定数削減の影響で後任人事が行われず、学芸員1人だけになった。そのため博物館は機能不全の状態に陥った。それまで1万5千人台であった年間入館者は、1万1千人台に落ち込んだ。こうして博物館の存在感は希薄となり、地元の人たちの博物館離れが顕著となった。

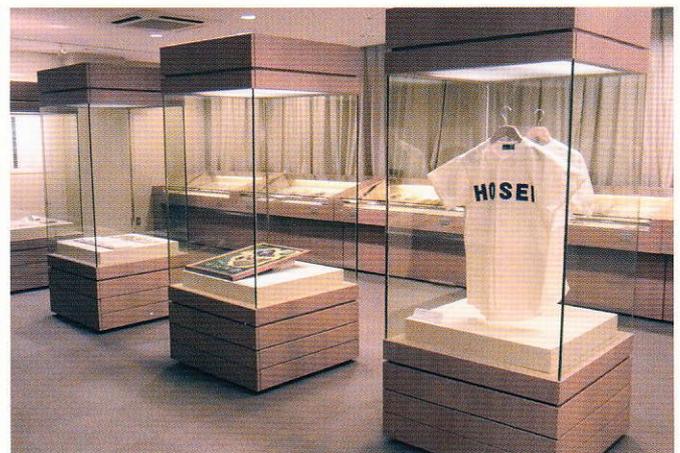
そのため2003年に地方自治法が改正された指定管理者制度によって、博物館をNPOが運営することを計画した。私が事務局を担当して、NPOのメンバーは市民30人ほど。元館長の下津谷達男先生にも理事になっていただき、有益なご意見をいただいた。

NPOが博物館を運営するようになってから5年が経つ(2年前にNPOを発足)。まずは、新しく博物館のミッションづくりから始めた。一言でいえば、“市民のキャリアデザインの拠点”となる場所にする。キャリア

とは、人の生きてきた道程や生き方を意味する。ここでいう“デザイン”とは、主体的に個人が設計や再設計するということである。つまりキャリアデザインとは、これまで受身的に社会や他者に任せてきた人生や生き方から、もっと主体的に自らを開拓する自立的な個を目指す生き方に転換することを意図している。そこで、博物館は、地域で生活する人たちの生き方を支援する場に転換をはかることにした。

予算は、直営時代とほぼ同額である。これまで常勤職員(館長1人、事務職1人、学芸員1人)から、館長非常勤1人、事務職非常勤1人にして、常勤学芸員4人にした。学芸員は全てNPOで採用した。直営時代の学芸員1人を4人に増員した。これで脆弱だった学芸力を強化する体制ができた。館長や事務職員は臨時職員にした。また、これまでの特別展1回から、企画展3回を加えて計4回にするなど事業を拡大することもできるようになった。その結果、入館者は、V字回復をして3万人になったし、市民サービスも向上した。この仕事は現在進行形となっている。なお、2012年3月には7年間の仕事を『公立博物館をNPOに任せたら～市民・自治体・地域の連携～』として上梓する予定となっている。

最後に、青木豊先生のご紹介で院友を学芸員に採用することができた。博物館のことでは、今でも下津谷先生にご指導をいただいている。なお、学位論文では、亡き加藤先生、段木先生のほかに、小林達雄先生にご尽力をいただいた。私が今日でも元気に仕事ができることは、こうした院友の先生方のお陰だと感謝している。

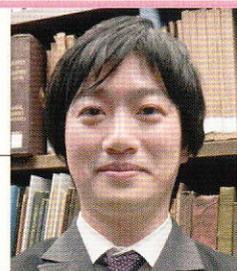


2011年実習生による企画展示

二足の草鞋の新米雑芸員

千代田区立日比谷図書文化館 ミュージアム部門 責任者

下湯 直樹 (しもゆ なおき) 114期史・116期博前史



私が勤めております千代田区立日比谷図書文化館は、平成21年7月、東京都から千代田区に移管され、改修工事を経て2011年11月4日（金）にグランドオープンをしました。当館は、旧都立日比谷図書館の100年におよぶ歴史と伝統を引き継ぎながらも、従来のライブラリー機能にミュージアム機能、文化活動・文化交流機能が融合した新しいタイプの総合文化施設を目指しております。その運営は「民間のノウハウ活用によるサービスの向上、多様な専門的能力を持つスタッフの確保、効率的な運営などを目的として、指定管理者制度を導入」し、「利用者の利便性の向上を図り魅力ある施設としていく」という千代田区の意向のもとに小学館集英社プロダクションを代表企業とした五社のコンソーシアムが指定管理者に選定され、五年七カ月の年限で運営を任されています。

さて、当館に勤める以前は恩師であります青木先生、落合先生のもとで母校の國學院大學博物館学研究室の助手を三年間しており、非常に楽しく仕事や研究をさせていただきました。特に、毎夜の勉強会（宴）での酒の肴に出される地域の名産やそれにまつわる学術的なエピソード、先生方の骨董コレクションの披露など強く印象に残っております。今考えれば私の人生のなかで、かなり贅沢でかつ貴重な時間でありました。

青木先生からは常々博物館の世界に入るには「まずはバッターボックスに立つことが大事だ。デッドボールでも塁に出たらこちらのものだ」という教を受けていたので、この歳でろくに社会人経験のない私も博物館の世界に体当たりの「デッドボール」で一步を踏み入れることができました。さらに、それまでの研究テーマが展示論であったことから新設の「博物館展示論」の非常勤講師の依頼もいただきました。最初は現場と教壇の二つを両立できるか不安でしたが、同時に二足の草鞋を履いたことで、博物館の現場で得た経験や知識が大学の授業にフィードバックでき、一方授業準備で自分の足りない知識が補われるなど現在では良い意味で相互補完の関係となっております。「若い時苦勞は買ってでもせよ」という座右の銘のもと無理がきくうちは、ミュージアムスタッフと大学の講師の二足の草鞋を出来る限り努めていきたいと思っております。

さて、多くの諸先輩方が仰っている通り、学芸員とは雑芸員、つまりなんでも屋です。私自身、当館を開館させるにあたり、今まで関わることのなかった業界や立場の方々と折衝し、セキュリティゲートや券売機など館の

備品の値下げ交渉、スタッフのユニフォームや名札の発注までしました。その雑芸員の大先輩であります院友学芸員諸氏には大変お世話になり、特に館内ルールの策定に奔走していた時期は本当に頼りにさせていただきました。私の瑣末な質問にも丁寧にお答えいただいたことに深く感謝すると同時に、自分が改めて多くの方々に支えられ、今この場に立っているのだと再認識しました。先輩の院友が後輩の面倒を見、また恩を受けた後輩がその恩を後輩に返す、そしてまたというように國學院大學の誇るべき良き伝統が今なお残っています。私自身、その伝統を受け継ぐとともに先輩院友諸氏から受けた恩を社会に還元していきたいと思っております。

最後に、指定管理者制度における学芸員採用は期限付きの契約が殆どで雇用の不安定さがよく問題視されます。しかし、指定管理に民間が参画したことで、これまで考古学や民俗学といった専門分野が重視されがちであった採用も企画力やコーディネート力、管理運営力等が問われる採用が多くなりつつあります。このような新たな学芸員像の雇用が創造されたことを考えれば指定管理者制度が残したものはマイナスな要素ばかりではありません。いつまでも「社会が悪い、政治が悪い」などと嘆いていても仕方ありません。経験を積むチャンスはどこにだって落ちこちています。あとはそのチャンスを掴むために日頃からアンテナをはり、バッターボックスに立つ準備をしていければいいのかと思います。さあ、思い切って「デッドボール」覚悟でその一步を踏み出してみましょう。



日比谷図書文化館外観

横浜市三殿台考古館に勤めて

(公財) 横浜市ふるさと歴史財団 横浜市三殿台考古館調査研究員

橋 口 豊 (はしぐち ゆたか) 109期史・114期博前史



国指定史跡三殿台遺跡は、横浜市磯子区岡村に所在する、標高約55mの台地全面に広がる縄文時代から古墳時代にかけての集落遺跡です。昭和36年(1961)の夏に発掘調査が行われ、特に弥生時代の住居跡が約170軒見つかりました。この調査には國學院大學も参加しています。平成23年(2011)は、三殿台遺跡発掘調査50年という記念すべき年でした。展示室のリニューアルやパネル展示などの事業を行いました。

当館は、この遺跡を保存・活用するために整備され、私は平成22年(2010)4月から、管理・運営業務に携わり、平成23年(2011)から指定管理者制度の二期目に入りました。

業務は、遺物整理ボランティアの協力を得ての出土遺物の再整理、普及啓発活動、施設の管理保全、その他庶務関係と全般に及んでいます。以下、普及啓発活動につ

いてお話しさせていただきます。

普及啓発活動は、来館者対応、火起こしや勾玉作りなどの体験教室、小学校や地域団体への出張講座になります。これらの中で特に重視しているのが、小学校や地域団体への出張講座を含む、地域との連携です。小学校のクラブ活動・サマースクールなどに参加し、子供たちとのつながりを深めています。

さらに、地域との連携は、展示室リニューアルに合わせて地元向けの内覧会を行い、また発掘50年記念パネル展示では、地域の人の表面採集資料をお借りして展示しました。

このような普及・啓発活動を推進することで、今まで以上に地域の理解と協力を得て、地域の誇りとなるような歴史・文化施設を目指して、少しずつではありますが活動を重ねています。

学芸員になって

伊那市立高遠町歴史博物館学芸員

北原 創平 (きたはら そうへい) 118期史



私が平成23年4月より学芸員として勤務している伊那市立高遠町歴史博物館は私が生まれ育った故郷にある博物館です。学芸員になりたいという夢を抱き、國學院大學文学部史学科へ進み、故郷の博物館に学芸員として戻ってこられたことはとても嬉しく、浮かれたままの気持ちで私は学芸員としての一歩は踏み出しました。しかし、勤務初日より大学時代に諸先生方がおしゃっていた「雑芸員」という言葉を思い知らされました。それは、伊那市高遠町には日本でも有数の桜の名所である天下第一の桜とも称される「高遠城址公園」があり、毎年4月には住民の数十倍の観光客が訪れ、博物館にも多くの方が来館されます。そのため4月はお客様の対応であつという間に過ぎ、いわゆる、「学芸員」としての業務は皆無でした。そのことが私の中に「雑芸員」という言葉を深く刻みました。その後、半年ほどが経ち古民家の資料調査や特別展の企画・設計など「学芸員」としての業務にも携わり、様々な経験をしてきました。学芸員になって一年も経っていない若輩の身ですが、院友学芸員の先輩方のように一線で活躍できるように日々精進していきたいと

思います。

最後になりますが、これから学芸員を目指す方々と自分自身に送りたい言葉があります。

「仰之愈高 望之愈遠 之を仰げば愈々高く 之を望めば愈々遠し」と言う言葉です。この言葉は高遠出身の偉人で東京音楽学校(現・東京芸術大学)初代学長も務めた伊澤修二が故郷 高遠に送った書に書かれた言葉で「学徳の高い先人を仰ぎ慕い 理想を追い求めて学ぶ」と言う意味です。



特別展風景

学芸員を目指す皆様へ

— 行政において博物館を支えるということ —

文化庁長官官房政策課 独立行政法人支援室施設第2係

辻 夏奈子 (つじ かなこ) 117期文・119期博前史



私は2011年4月より文化庁に非常勤職員として入庁し、長官官房政策課独立行政法人支援室施設第2係に配属となりました。施設第2係は、4つの国立博物館と2つの文化財研究所を運営している独立行政法人国立文化財機構を所管・監督する立場にあり、国立文化財機構が各館を円滑に運営するための行政的な支援を行っています。

私の業務は、主に事務処理の補助ですが、公共機関が発行する広報誌への記事掲載案の照会・記事執筆依頼・校正や、各館から送付されるチラシ・ポスター等の広報物の掲示・配布・管理など広報分野にかかわる業務が多いのが特徴です。

現在の職場は直接的に博物館を運営するような仕事ではありません。しかしながら、業務に係る様々な資料を作成する際に博物館学、特に博物館経営学の知識が必要とされることがあります。私は博物館経営学を研究していたわけではありませんが、大学院の授業において総合的に博物館学を学ぶことができたため、その知識が職場でも役立っています。

仕事内容は主にデスクワークですので、博物館勤務の学芸員のようにモノに触れる機会はありません。しかし行政側の視点から博物館経営を学ぶことができ、また各博物館の経営方針・経営状況等を間近で知ることができるので、これらの点は博物館に勤められるようになった場合に役に立つのではないかと考えています。また、間接的ですが、文化財を守り後世に文化を伝える仕事であるという点は、学芸員の仕事と共通するためとてもやりがいを感じます。

学芸員でもなく、社会人としてもまだまだ未熟な私から学芸員を目指す皆様へアドバイスできることはあまりありませんが、ひとつ言えることは、間接的にも博物館と関わり、博物館学的な知識を活かせる仕事は多いということです。そのような仕事に就いて様々な経験を積みながら学芸員を目指すのも一つの道ですので、精力的に博物館学を学び、諦めずに学芸員を目指してほしいと思います。

博物館学芸員養成を支える仕事

— 博物館学助手の日々 —

國學院大學 博物館学研究室 助手

野中 優子 (のなか ゆうこ) 116期史・118期博前文



平成23年4月に國學院大學博物館学研究室助手になり、日々の業務が自分の経験に無い事への挑戦であり、勉強することが多くとても充実した毎日を送っております。

博物館学助手の仕事と言っても一般的に想像しづらいものだと思います。助手の主な業務としては博物館実習Ⅲ・Ⅳの準備、図書管理、全国大学博物館学講座協議会(略:全博協)の事務局の仕事があります。

國學院大學の助手は実習助手ですので、博物館実習ⅢやⅣの業務が最重要になります。見学実習である博物館実習Ⅲはコース決め、大学事務担当者との折衝、旅行会社の手配、学生への説明、見学博物館へのアポイントメント、引率などのすべての下準備を一人で行います。また、日々実習室で行われる博物館実習Ⅳの備品の購入や授業準備も重要な仕事で、稀に授業をなさる先生のお手伝いをすることもあります。

これら実習の業務の他に、博物館学研究室には全博協の事務局がある為、その事務局として全国委員会の開催や全国大会の準備、全博協加盟校への連絡や問い合わせにお答えする

業務もあります。

他にも日々ここでは紹介しきれない細かな仕事がありますが、助手の仕事を経験して言うと、とにかく多くの人と関わる仕事であると思います。博物館学の各授業を担当して下さる先生方や大学事務の方、多くの受講生、博物館実習で訪れる博物館の学芸員やスタッフの方など、年齢も性別も様々な方と関わり、それぞれの立場の方を繋げる仕事ですから、どの方にも誠実に対応するよう心がけています。誠実であることがより良い信頼関係を作り、その先の仕事にも繋がっていくと信じて日々の業務にあたっております。

私は学芸員ではありませんが、学芸員養成の裏方として学芸員を目指す方々に申し上げるなら、より多くの人と関わり、その時々だけの付き合いではなく、信頼関係を築いて欲しいということです。学芸員は資料を扱いますが、資料を守るのは人です。人と良好な関係を築くことが学芸員にとって重要であると感じます。私自身、活躍なさっている院友学芸員の先生方に続けるよう精進してまいります。

國學院大學博物館学教員紹介

大学院担当教員	青木豊 (國學院大學) 資料保存展示論研究・特殊研究 博物館学史特論 博物館概論、博物館教育論 博物館資料論、博物館展示論 博物館実習Ⅲ・Ⅳ	落合知子 (國學院大學) 地域博物館論研究・特殊研究 博物館学専門実習・特殊実習 博物館実習Ⅲ・Ⅳ	小川直之 (國學院大學) 博物館資料論特論B I (民俗)	鷹野光行 博物館史特論 お茶の水女子大学 教授
	矢島國雄 欧米博物館史特論 明治大学 教授	池田宏 博物館資料論特論A II (有職) 東京国立博物館 上席研究員	原田一敏 博物館資料論特論A I (金工) 博物館実習Ⅳ 東京芸術大学 教授	岩崎均史 博物館資料論特論B II (絵画) たばこと塩の博物館 主任学芸員
	井上洋一 博物館経営特論 東京国立博物館 学芸企画部企画課長	栗原祐司 博物館関係法規特論 文化庁文化財部 美術学芸課長	駒見和夫 博物館教育活動特論 和洋女子大学 教授	石川貴敏 展示工学特論 丹青研究所 部長
学部担当教員	内川隆志 (國學院大學) 博物館実習 I	有元修一 博物館実習Ⅳ 目白大学 教授	樋口政則 博物館資料保存論 江戸川区郷土資料室 学芸員	山田磯夫 博物館資料保存論 横浜美術大学 准教授
	杉山正司 博物館経営論 埼玉県立歴史と民俗の 博物館 学芸主幹	石田武久 博物館実習Ⅰ・Ⅳ 博物館概論 儀礼文化学会事務局長	榊淵規彰 博物館実習Ⅳ 神奈川県生涯学習 文化財課	粕谷崇 博物館情報・メディア論 白根記念渋谷区郷土博物 館・文学館 学芸員
	野中優子 (國學院大學) 博物館実習Ⅲ 博物館学研究室 助手	伊藤慎二 (國學院大學) 教育研究情報センター 助教		

※ 大学院授業, 学部授業

平成24年度 大学院開講科目

科目名	単位	時期	担当者	備考
論文指導実習	4	通年	青木豊 教授	
資料保存展示論研究・特殊研究	4	通年	青木豊 教授	
地域博物館論研究・特殊研究	4	通年	落合知子 准教授	
博物館史特論	2	後期	鷹野光行 講師	
博物館学史特論	2	前期	青木豊 教授	
欧米博物館史特論	2	前期	矢島國雄 講師	外書講読
博物館関係法規特論	2	前期	栗原祐司 講師	
博物館資料論特論A I (金工)	2	後期	原田一敏 講師	
博物館資料論特論A II (有職)	2	前期	池田宏 講師	
博物館資料論特論B I (民俗)	2	前期	小川直之 教授	
博物館資料論特論B II (絵画)	2	後期	岩崎均史 講師	
博物館経営特論	2	後期	井上洋一 講師	
博物館教育活動特論	2	前期	駒見和夫 講師	
展示工学特論	2	前期	石川貴敏 講師	
博物館学専門実習・特殊実習	4	通年	落合知子 准教授	(前) 学術資料館等でのインターンシップ1単位、夏期集中授業学外実習1単位を含む (後) 夏期集中授業・国内外インターンシップ各1単位を含む